

# 発達障害のある幼児をもつ 韓国人母親の障害受容に関する PAC 分析<sup>1)2)</sup>

—— 社会的支援体制と育児ネットワーク機能の視点から ——

内藤 哲雄<sup>3)</sup>・金 娟鏡<sup>4)</sup>

## PAC Analysis of Acceptance by a Korean Mother of Her Child's Developmental Disorder : Social Support Organizations and Functions of Child Rearing Networks

Tetsuo NAITO

(Shinshu University)

Yeonkyeong KIM

(The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University)

### 問 題

子どもの障害の治療に、主たる養育者である母親が参加することで、治療効果が促進されることが指摘されてきた（権平，1980）。しかし，母親が子どもの治療に当事者として参加するためには，母親自身が子どもの障害を受け容れていくことが前提となろう。そこで，子どもの障害についての母親の受容過程やその構造を把握し，いかなる要因が障害受容を促し，それぞれの要因がどのように関わっているのか，また母親の障害受容が他の諸要因にいかなる変化をもたらすのかを探ることが必要と考えられる。

これまでの研究によると，相談機関での療育指導や母親のカウンセリングなどの社会的支援体制が母親の受容的態度を促し（内藤，1989；竹内，2000など），また夫をはじめとする家族，周りの母親といった育児ネットワークが母親の障害受容に支援的機能を果たすこと（ビョン，2001；リ・クォン・ソ，2001など）が指摘されている。そして近年では，これらの問題について質的に研究することの必要性が唱えられるようになった（夏堀，2001）。なぜならば，集団による平均値的データの分析からは，社会的支援体制によるカウンセリングの有効性，育児ネットワークの機能の差異を明かにできるとしても，それぞれの要因がどのように母親の障害受容を促すのかを，個々の事例分析のように鮮やかに総合的に解明するこ

<sup>1)</sup> 子どもの障害については，被検者からの情報だけでは，軽度の自閉性障害なのか，情緒障害なのかが不明であることから，発達障害として論考することとした。

<sup>2)</sup> 本研究は，第1著者内藤が研究の総括に関わり，第2著者金が研究の実施を行ったものである。面接に参加して下さった被検者Aさんに感謝申し上げます。

<sup>3)</sup> 信州大学 人文学部

<sup>4)</sup> 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科

とができないからである。奇・大野（1996）は、障害児をもつ母親の障害受容を検討する方法として、次のような3段階の面接調査を提案している。第1段階は、具体的な出来事を中心にし、育児過程を振り返り育児略譜を作成する。第2段階は、その都度感じた気持ちを中心に育児過程を振り返る。最後の第3段階では、全体を通して面接内容の整理・確認をするといった一定の手続きである。しかし、この技法では、各段階ごとに対象者のエピソードや感情を探るといっても、取り上げられた出来事間の関係は、研究者の恣意的な枠組みによって解釈されやすい危険性がある。そこで本研究では、個人別に連想させるという点で、奇・大野（1996）の手続きと類似点をもちながらも、連想刺激に基づいての自由連想や多変量解析を援用して、より操作的・客観的に個人別にイメージ構造を分析することができるPAC分析（内藤，1997，2002）を用いることとした。棚原・財部（1999）は、PAC分析を用いて、精神薄弱養護学校に子どもを預けている母親の障害受容の構造を検討し、PAC分析が障害受容の個人別独自性を明らかにするのに有効であると述べている。また、PAC分析には個性性と同時に、1事例であっても、ある種の典型としての普遍的法則を見出せることが明らかにされている（内藤，2000）。

本研究は、発達障害のある幼児をもつ韓国人母親を対象に、母親の障害受容に関わる要因の構造について、PAC分析を通して明らかにすることを目的とする。たとえ1事例であっても、韓国における社会文化的な背景を反映した障害受容の構造分析ができる可能性があり、日本で明らかにされた知見や構築された理論と比較しての違いを検討できると考えられるからである。そこで本研究では、母親が子どもの障害を受容するに際して、社会的支援体制や育児ネットワークがどのような機能を果たすのか、そして母親が子どもの障害を受容することが、母親自身及び家族との関係にどのような影響をもたらすのかを、韓国人母親のイメージ構造を分析することで明らかにすることを目標とした。

## 方 法

### 被検者

被検者の募集は韓国のP市にある幼稚園を通して行われ、調査の趣旨や協力を依頼する文書を配布し、協力できる方には可能な日程、連絡先を記入してもらった。後日、被検者と電話連絡を取り、面接の日程や場所を決めた。本研究で取り上げる被検者Aは、30代後半の韓国人母親である。大学卒業後結婚し、常勤の仕事についたが、第1子が生まれて辞めた。その後、再就職し、第2子の妊娠を機に退職し、現在は専業主婦である。子どもは8歳の男児、5歳の男児、3歳の男児の3人で、40代前半の夫との5人暮らしである。第2子の5歳児に発達障害がみられる。

### 手続き

面接は第2著者金が担当し、韓国のP市にある被検者の自宅において、韓国語で行われた。被検者が面接に構えず、率直に気持ちを語れるように、プライバシーを侵害しない範囲で、日常会話を交えながら大学卒業から出産までの経緯について聞くことで、被検者とのラポールを形成した。次いで、PAC分析の実施法について被検者に説明した後、連想刺激として、

以下のような印刷した連想刺激文（原文は韓国語）を提示するとともに、口頭で読み上げた。

「日頃の母親としての自分を振り返って、お答えください。母親とは、子どもに対してどのような役割をするものだと思いますか。あなたは、母親としての自分をどのように思いますか。どんなところからそのように思えてきますか。そのことからどんな感情が生じるでしょうか。また、周りの人々は、母親としての自分を思う際に、どのように関わってきますか。そして、そのことからどんな感情が生じるでしょうか。頭に浮かんできたイメージや言葉を順番にカードに記入してください。」

そして、用意したカードを渡し、頭に浮かばなくなるまで、連想された項目をカードに記入させた。この後、重要だと感じられる順にカードを並べ替えさせて、カードに番号を記入させた。次に、連想項目間の類似度距離行列を作成するために、カードをランダムに2枚ずつ選び、直感的なイメージの上で、各対がそれぞれどの程度類似しているのかを、「非常に近い(1)」から「非常に遠い(7)」までの7段階の評定尺度を提示し、その近さを回答させた。

次いで、被検者が休憩を取っている間に、検査者は作成された類似度距離行列に基づき、ウォード法でクラスター分析を行った。そして、析出されたデンドログラムを2枚プリントアウトし、余白部分に連想項目を記入した。そのうち1枚を被検者に渡し、再び面接を開始した。もう1枚は検査者がみながら、デンドログラムの結果について、被検者のイメージを聞いた。具体的には、検査者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに項目を読み上げ、併合された各クラスターから連想されるイメージや、意味する内容の解釈、併合された理由として感じられるものについて質問した。各群についての被検者の解釈が終了した後、さらに、第1群と第2群、第2群と第3群のように、群間を比較させてのイメージや解釈の異同を聞いた。続いて、デンドログラム全体のイメージや解釈について聴取した。これらの作業に続いて、各連想項目の単独のイメージがプラス（+）、マイナス（-）、どちらともいえない（0）のいずれに該当するかを回答させた。最後に、重要と考えられる連想項目を取り上げ、そのイメージ内容について補足質問をした。なお、被検者の解釈の部分については、本人の許可を得てテープレコーダーに録音し、後ほど逐語訳を原則として日本語に翻訳<sup>5)</sup>した。

## 結 果

クラスター分析の結果は、Figure 1のようになった。まず、連想項目の中で、重要順位の高い順に1/3となる4項目を取り上げると、1) うまく行くはずだと楽観的に思う、2) 身体的に健康で、正しい考えをもつ大人への成長を助ける、3) 子どもの成長を支える役割、4) 努力するほうだと思う、となる。これらは、いずれも第1クラスターに属しており、母親としての子育ての目標は大人への成長を助け、支える役割であり、そのような努力がうま

<sup>5)</sup> 日本語への翻訳については、次のように行われた。まず第2著者金が、韓国語を日本語に逐語訳した。次いで、第1著者内藤と金が、日本語に直された単語や文章の意味を口頭で確認しながら、韓国語のニュアンスをできるだけ活かした日本語にふさわしい表現を探索する方法で翻訳作業を行った。

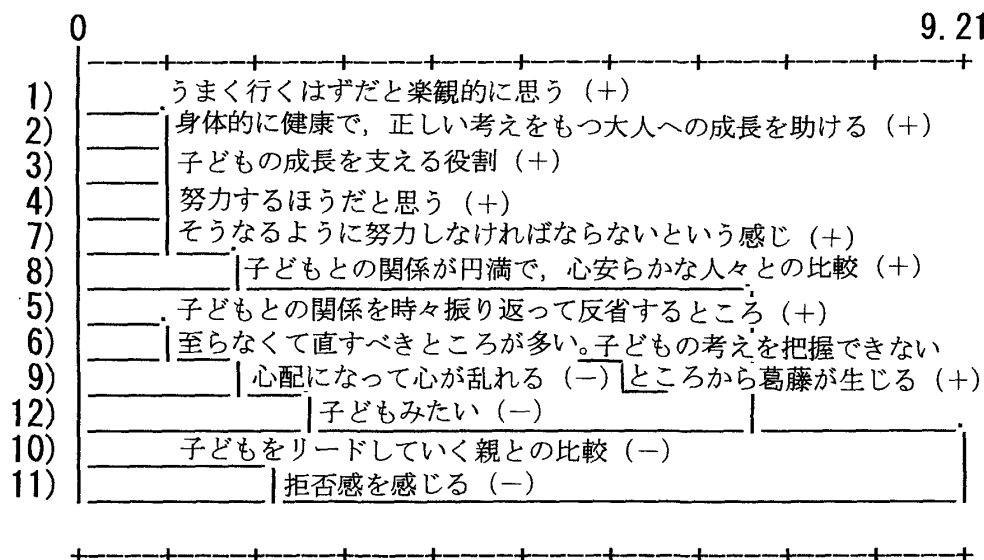


Figure 1 被検者Aのデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろの（ ）内の符号は単独でのイメージ

く行くはずと楽観的に思うようにしている、という内容である。つまり、「成長の主体は子どもであり、それを促進し支えるのが母親である」との自覚と達成への期待を強く感じていることを示している。また、重要項目4つの単独イメージのすべてがプラスであることから、上記の母親役割を私的に受容し努力していることが推測される。連想された12項目すべての単独イメージをみると、プラスが8項目、マイナスが4項目であり、ゼロが0項目であることから、葛藤があるものの肯定的なイメージのほうが強く、自己疎隔感を感じることなく母親としての自身を直視していることがうかがえる。

#### 被検者Aによるクラスターの解釈<sup>6)</sup>

クラスター1は、「うまく行くはずだと楽観的に思う」～「子どもとの関係が円満で、心安らかな人々との比較」までの6項目：子どもを育てていく中で、健康が一番重要だと思います。身体的に健康で、正しい考えをもつ大人への成長を助けることは……言葉通りですが（笑い）。正しい価値観をもち、他の人々との関係が円満であってほしいですね。それから、楽観的であってほしいですね。そういう性格だと、将来大人になってから逆境を克服できるのではないかと思いますし、一番重要なことだと思います。私が親としてできることは、そういうところが生活の中で自然に子どもの身につくように支えることだと思います。他の母親をみると、子どもの早期教育に力を入れていますけど、そういうところよりも……うーん、

<sup>6)</sup> 被検者の語り口には、そのほとんど全てに、多面的で複合した語り尽くせないニュアンスが統合的に凝縮されている。またデンドログラムのイメージや解釈の報告を進めていく中で、被検者自身が次第に心の内面を探索し、明確化していくプロセスについては、被検者自身の語りそのものが唯一の客観的な資料であり、それらをたどっていくことで初めて明瞭となる。したがって本研究では、いくぶんかは執拗さや冗長を感じさせることがあるとしても、被検者の思いが込められた語りを活かし、結合しながら全体構造を明確化していきたいと考え、被検者の語りを省略せず、すべて掲載することとした。

でも、子どもに正しい価値観を身につかせることに重点をおく母親もいまして、そういう場合は、子どもと親の関係が円満で仲がよさそうにみえます。そういうところが羨ましく、またそういう風になるよう、私なりには努力していますが、うまく行かなかったりしますね。そういう内容かなあー……。私は子どもたちを縛りたくありません。それが一番大きいと思います。うーん。(Q:その他にありますか?)<sup>7)</sup>子どもが成長するにつれ、子どもなりの悩みが生じると思いますが、そういうところを察することができる母親になりたい……。そうなるように努力しているところです。

クラスター2は、「子どもとの関係を時々振り返って反省するところ」～「子どもみたい」までの4項目:子どもを育てることは、大変なことですね。3人の子どもそれぞれの性格も違いますし、子どもは年齢によって相当に変わってきますから。子どもがなぜそういう行動をみせたのか、まったく理解できなくて、子どもに適応できなかった時期もありましたね。理由を知らないわけですから、息苦しくなったりしましたね。そうすると、悩んだり、心配になったり。悩む時間が長くなると、そういうところを解決しようと、また悩み始めますから(笑い)。上の子は、小学校3年生なんですけど、普段は断片的に自分の不満をぶつけてくるほうなんですよ。そうすると、私は子どもの不満の理由がわからなくて、なぜかと聞きますが、聞いても答えてくれませんし、そうすると子どもと喧嘩をするようになりますね。後でじっくり子どもの話を聞いてみると納得が行きますが、そうやって子どもが最初から最後まで話すまでは、子どもも私も互いに悩んだり、葛藤したりしますね。子どもの考えていることを知らないわけですから、最初からちゃんと話してくれればいいのに……。どうしていつも最後に大声を出させるのか……。 (笑い)。子どもと喧嘩をするときは、子どもと私との年齢差がないように感じます(笑い)。そう感じるときが多いですね。それから、約10年間の間、3人も子どもを育てていると、昔は子育てが楽しかったのに、最近は面白くないんですよね(笑い)。面白くなくて、怠けてくるところも出てきますし。とくに、次男の場合、いろいろ大変だったんです。その子にあまりにも神経を使ってきたから、かなり疲れているように感じられますね。

(Q:具体的にどういうところが大変でしたか?)ある発達障害をもっています。うちの次男の場合、情緒的な部分がまだ未熟だそうです。でも、今は5歳ですが、ずいぶん良くなりましたよ。良くなったけれども、まだ自分の感情のコントロールができないときがありますね。そういうところがあって、昔はもっと酷かったわけですから、約2年間は精神的にあまりにも大変でした。今は昔に比べるとよくなっていますから、やるべきことがなくなった感じですよ(笑い)。今はすくすく育ってくれていますから。ですから、子育てに疲れたと思うこともできますけど……。子どもの問題で解決策が見つからないときが、一番苦しいときではないかと思います。次男の場合、遊戯療法もしましたけど……。1ヶ月しか受けていません。2年前のことですが……。最初は小児精神科に行って診断を受けましたね。でも……。病院側に対してあまりにもがっかりしたんです。検査は散々やっておいて、何の答えも出してくれませんでしたから。自閉症ではないといいながら、曖昧な言い方をしたんです。その後、

<sup>7)</sup>「Q:」に続く発言は、検査者による質問を示す。また、非言語的反応については、「……」は沈黙、「!？」は驚きと疑問が同時であること、「笑い」は笑い、「うーん」はため息での応答を示す。

いろんなところに行きましたけど、そのたびに診断結果が違っていたんです。診断体系がめちゃくちゃだと思いました。それであのときに、「私の子どもなんだから、自分で判断したほうが一番早い」と感じましたね。……病院から遊戯療法を勧められたこともあって、私立の言語治療室に行ったら、病院では自閉症ではないといったのに、言語治療室ではうちの子どもが自閉症だというんです。自閉症だといわれたから、私はそう信じ込んで……（笑い）。それで1ヶ月間通いましたけど、先生たちはうちの子を自閉症に追い込んで行ったんです。わかりますか？（笑い）。子どもを自閉症に追い込んだんですよ。自閉症だという枠から、先生たちが抜け出すことができなかったんです。ですから、子どもに希望が見えませんでした。でも、あの治療はすごく役に立ちましたよ。そこでの助けてもらった部分は、今まで私が子どもにしてあげられなかったところでもありましたから。先生たちは6ヶ月以上の治療が必要だといっていましたけど、私としては幼稚園に行かせてもよさそうに思えて……。ですから、先生たちは「自閉症なのに、あまりにも早く良くなるんだねー」というわけですよ（笑い）。「こんなはずがない！」というんです。そういいながら、「この子は自閉症だ」と私をずっと洗脳するわけです。「自閉症がこんなに早く良くなるはずがないのに、おかしい」……（笑い）。治療を受けて一週間で子どもの変化が現れましたから。ですから、先生たちは「こんなことはなかったのに!？」といったと思いますけどね。治療を受けている1ヶ月の間に、子どもはものすごく変わったので、その治療法が効いたといえますね。でも、先生たちがずっと自閉症だと決めつけていましたし、子どもが大きくなっても自閉症は治らないわけだから、ずっと限界をもって社会生活をしなければならない、という部分をずっと繰り返して話していましたから、私としてはいい気分になれませんでしたね。母親だから、子どもに期待する気持ちがありますから。私がみた限りでは、うちの子は自閉症ではないのに……。自閉症的な部分があるとしても、先生たちが話すほどではないのに……。悪いところばかり強調して話をするから……。先生たちが仕事に情熱をもって関わってくれたことには、ありがたく思っています。でも、子どものことは私が一番よく知っていますから、これで十分だと思いましたね。ですから、幼稚園に行かせました。幼稚園に行ったらさらに良くなっていますから、幼稚園の先生たちも苦労していると思います（笑い）。最近、初対面の人ならわからないほど良くなっていますけど、まだ一つ問題が残っていて……。意地っ張りなところがあって、他の子どもだったら納得することがなかなか受け容れられないようで……。でも、以前よりも良くなって、自分の思い通りにならないと、機嫌の悪そうな顔をして、（幼稚園の）教室の隅っこに座っているそうです。先生が近づいて行くと「今は気分がよくないから、一人にさせてください」といえるようになったそうです。

クラスター3は、「子どもをリードしていく親との比較」～「拒否感を感じる」の2項目：程度の差はありますが、周りの母親の中には、子どもを早期教育に駆り立てる人が多いんですよ。それで、自分の子どもは賢いというんです。そういうところが……何とさえいいんだろう……そうしないでほしい（笑い）、そんな感じがしますね。小さい子どもに英語を教えて、家の中でも英語でしゃべらせて、英語で日記を書かせたりする母親もいるんですけど、そういうことをする母親はそれなりの考えがあるからさせているんでしょうけど、そうやって子どもを引っ張っていく人も多いんじゃないかと思います。子どもの能力を無視

して無理させているようで……子どもの心をみていないようで、子どもが可愛そうに思えますね。

### クラスター1とクラスター2の比較

子どもの成長を助ける役割といった意味では、子どもとの関係を振り返って反省し、直すべきところを考える点においては、(クラスター1とクラスター2は)似ていると感じますけど……うーん、大人気なく子どものように感情的になりがちなところは、直していくべきだと思いますね。上の部分(クラスター1)に役に立たないようで。

### クラスター2とクラスター3の比較

子どもの早期教育に関しては、周りの話を聞くと不安になるところがありますね。上の子が小さいときは、私の育て方が間違っているのではないかと思ったり、小学校に入って勉強が遅れたらどうしよう、と心配になったり。ハングルも読めなかったし、数字も数えられなかったわけですから、2年生までは苦労したと思いますけど(笑い)。よりによって、あのときは、次男が私を一番苦しめた時期でもありましたね。だから、上の子は目に入ってこないで、次男のことばかり気にかけていましたから、上の子は一人でやるしかなかったと思います(笑い)。でも、その部分に関しては結果的に悪かったとは思いません。むしろ、勉強に苦労したので、子ども自らが勉強したいと思うようになったようですよ(笑い)。今は特に気かけなくても、自分のことは自らやっていますから、過去2年間の子どもの苦労は無意味ではなかったと思います。

### クラスター1とクラスター3の比較

ある部分に関しては、母親がリードする必要があると思います。でも、母親がリードすべきところは、責任感とか、約束を守ることとかだと思しますので、常に子どもに言い聞かせています。そういう部分は子どもの成長を助けますが、子どもの立場を考えないで、無理やり引っ張っていく部分(クラスター3を指しながら)は、上(クラスター1)と相反していると感じますね。私は子育ての中で、自分が子どもの頃に親に対して感じた気持ちを振り返るほうだと思います。でも、子どもが理解できないときが多いんですよ(笑い)。そんなときは、周りに聞いてみたり、父親(夫)と話をしたりします。私は心配するほうですけど、父親の場合は、些細なことには悩まないほうなので、私が悩みを打ち明けると一緒に悩んでくれるより、「余計な悩みだ」というので、そういうところが私の助けになりますね。その他には、<絵本を読む大人の会>という会に入っているんで、そこに集まった母親と話をし、いろいろ助けてもらったり……。

### 全体について

今みると、良き母親になろうとするコンプレックスがあるようです(笑い)。上の子が小さかったときは、そう思っていましたから。本とか映画などに出てくるような、教養があって、天使のような母親になろうとしましたが、実際に子育てをしてみると、そうは行きませんでしたね。子どもが一人のときは可能だったけど、でも、二人、三人となると、そう

は行かないことに気づきましたね。今は上の子の話によると「ママは継母みたい」というほどですから（笑い）。こんな話が出てくるほど、昔とは違っていると思います。昔は継母のような母親になってはいけない、そういう母親は悪い母親だとの強迫観念があったと思いますけど、今は自然に振舞ったほうが良いと思います。叱るべきことがあったら、その場で叱ったり。でも、後には引かないほうですよ。子どもと喧嘩をしても、すぐに仲直りできるような……子どもから「ママ、まだ怒っているの？ ママが怒っていると僕の気分も良くない。早く笑って」と話をかけてきますから、そういう関係に関しては、円満になれた気がしますね。むしろ腹が立つことをじっと我慢していたときよりも。昔は子どもに怒ってはいけないという強迫観念のせいで、子どもを叩いた後は、ずいぶん悩みましたが、最近はそういう悩みが役に立たないことに気づきましたね。子どもとの関係についてあまりにも悩みすぎることは……。それが度を越していなければいいと思います。重苦しいものではなく、軽く考えるようにしています。……人生を生きるというのは、そういうことではないかと思います。もちろん、金持ちになれたらいいですけど、期待通りに変わってくれないのが人生なんですよ。子どもがお勉強もできて、金持ちになって、出世できたらいいに決まっていますけど、親の欲通りにならないと思います。私の親をみても、昔の親はみんなそうだと思いますが、私は長女なんですけど、私に対する期待があまりにも高かったんです。私の意志とは関係なく。それで、大学受験に失敗して目標とした大学に入れなかったんですけど。私は親を恨んだことは一度もありませんけど、親は私をなじりましたね（笑い）。むしろ、親はありがたいと思うべきではないかと感じますけど……。信じてたのに裏切られたとか、昔のあなたは違ってたとか……そういう話を聞くたびに、大人なのに、どうしてこんなに大人気ないんだろうかと思ったりしましたね。子どもよりも考えが浅い感じがしまして、でも、私が親になってみると、何となく理解できましたね（笑い）。そういうのは、人生を通して理解していくものだと思います。この年になって、親になって理解できることですから、うちの子どもの年齢のときは、理解させようとしても、理解できないと思います。そういう部分は、いろいろとずいぶん考えていましたね。なぜかという、私も子ども頃、そういう部分に関して、心が不安定でしたから。親との関係がうまく行かなかったので、幸せではなかったと思っています。今は振り返ってみると、人生には上り坂と下り坂があって、トータルして大きな変化はないように思いますけど。30代初めの頃は40代になったら、ずいぶん変わっていると思っていましたが、いざ40代を目の前にしてみると、何にも大きく変化したことはないように感じます（笑い）。ですから、欲を出すのではなく、心安らかに、幸せにそう暮らしたほうが良いと思いますね。いくら母親が引っ張ろうとしても、できないことはできないことですし、親から自立して育てられたほうが、大人になって自分のことは自らよくできるようになりますから。一番重要なことは「思い通りに行かない」ことです（笑い）。実は、次男のことで心配になっています。でも、ゆっくりだけどもっと良くなるはずだと思うようにしています。良くなならないかもしれないと思うと、体が病気になります。精神的なダメージを受けると、身体的な症状が出て辛くなって、耐えられなくなったりしますから。ですから、ストレスを受けないようにしています。心を楽にすること、それしか薬はないように思います。昔は怒ったりすると、その怒りの感情のせいで体が病気になったりしましたが、今は怒ってもそういう感情に左右されない感じがするんですね。怒りを感じるとその都度怒った



りして解決しようとしています。そうしたら、体調が良くなりましたね。以前とは違って、体が軽くなった感じがしますね。……うちの子（次男）のせいで、「他の子どもたちが迷惑を被ったりしませんか」とか、「他の母親からうちの子を幼稚園に来させないようにしてほしいといわれませんか」とか、そういう話を私のほうから幼稚園の先生にしています。クラスにそういう子がいると、授業に支障が出ますから。とくに、幼稚園は母親が送り迎えをしているわけですから、子どもたちとも毎日のように会っているんですね。ですから、不満を抱いても当然かなあーと思って、そういうところを心配していることを幼稚園の先生に伝えています。先生が話を切り出す前に、私のほうから話をしているからか、いつも「そんなことはない」といってくれますね。むしろ、うちの子がいるからこそ、「他の子どもたちが助けられる部分が多い」といってくれています（笑い）。親の立場からすると、そういう部分が大事だと思いますね。

### 補足質問

子どもとの関係が円満で、心安らかな人々との比較：〈絵本を読む大人の会〉で会った母親のことなんですけど、他の周りの母親とは違う考えかたをもっているんですね。子どもを一生懸命遊ばせたり、想像力を高めようとしたり……基本的なベースの教育を大事にするんで、子どもをリードして行こうとする他の母親とは違うと思いますね。

### 被検者Aについての総合的解釈

#### クラスター1の解釈

被験者Aは、母親としての役割を「子どもの成長を支える」ことと捉えている。このような母親役割を準拠枠とするように移行したのには、早期教育よりも「正しい価値観を身につかせることに重点をおく母親」に出会い、子どもと親との関係が円満で仲がよさそうなことを羨しく思ったことによる。「子どもが身体的に健康で、正しい考えをもつ大人への成長を助ける」ために努力している。理想の子育てとは、子どもを縛らず、成長につれ生じる子どもの気持ちを察することができ、「子どもとの関係が円満で心安らかな」ことであるとの思いを告げている。そして、母親として「努力するほう」だと自己評価しているが、実際の子どもとの関係は思うようにうまく行かないことも少なくなく、さらに現実に合わせて、さらに「努力しなければ」と感じている。そのためにも「うまく行くはずだと楽観的に思う」ことを心がけており、それは重要度順位第1位としていることから裏付けられる。以上のことから、クラスター1は、〈理想の子育てと将来への楽観的な見通し〉と解釈することができよう。連想項目の単独イメージがすべてプラスであることから、子育ての目標に向かって努力する自分を、肯定的に受け容れていることが示唆される。

#### クラスター2の解釈

3人の子どもそれぞれの性格、発達段階によって異なってくる「子どもの考えを把握できず」「なぜそういう行動をみせたのか理解できなくて」子どもと喧嘩をしてしまうこともある。また、次男のことで「心配になって心が乱れる」など、障害児を抱えた子育ての不安を捨てきれない。そういう母親としての自分を、「至らなくて直すべきところが多い」「子ども

みたい」と感じ、子どもとの関係や自分が子どもの頃の親との関係を時々振り返って反省している。一方、次男の発達障害が発見され、小児精神科や治療室に通っていた時期と、長男が小学校に入った時期が重なり、「上の子は目に入ってこないで、次男のことばかり気にかけていた」けれども、結果的には長男が「自ら勉強できるようになった」と、子どもの主体性の芽生えをもたらした出来事として、肯定的に意味づけている。このクラスターは、子育てに戸惑いや不安を感じながらも、これまでの子どもとの関わり方を反省し、より子どもの考えに即した関わり方を模索する内容でまとまっており、＜子どもとの関わり方への葛藤や反省＞と解釈できよう。また、クラスター2は、連想項目の単独イメージがプラス2項目、マイナス2項目となっており、「葛藤」状態が表れている。

### クラスター3の解釈

早期教育に駆り立て、「子どもをリードしていく」周りの親に対して、「子どもの能力を無視して無理をさせている」と拒否感を感じている。長男が小さい頃は、被検者Aも「周りに比べて私の育て方が間違っているのではないのか」と不安を抱くこともあったが、今は、「子どもの能力を無視して無理をさせている」と批判し、子どもの気持ちを先に考えるように子育て観が変化している。そこで、クラスター3は、＜大人本位の引っ張る子育てへの拒否感＞と名づけることができよう。連想項目の単独のイメージをみると、いずれもマイナスであり、否定的な感情が示されている。

### 全体についての解釈

各クラスターを結節する項目は、Figure 1のデンドログラムをみると、クラスター1では、理想の子育てモデルを代表する「子どもとの関係が円満で、心安らかの人々との比較(+)」、クラスター3では、周囲の大人本位の引っ張る子育てへの反発を表す「拒否感を感じる(-)」である。この両者を、クラスター2での理想を実現する大人になりきれない反省を込めた「子どもみたい(-)」が結び付けており、＜個人的な理想と社会一般での理想との間を揺れ動く＞被検者Aの心情を象徴していると考えられる。また、クラスター3は大人本位の子育てをしてきた被検者Aの＜過去＞の姿であり、クラスター2は子どもとの関係の調節に臨む＜現在＞、クラスター1は、＜未来＞に対する楽観的な期待を示しており、それぞれのクラスターの関係には、過去から未来への時間的展望が現われていると解釈できよう。

## 考 察

### 1. 子どもの障害受容に関わる要因：社会的支援体制と育児ネットワークの機能

韓国人母親を対象とした本研究は、障害児を抱えて十分な療育指導を受けることができず、治療機関を彷徨し苦しんだ事例であった。被検者Aは、次男の発達障害の問題に直面し、小児精神科を訪れいくつもの診断検査を受けるが、明確な診断結果を得ることができず、十分な療育指導も与えられていない。その後を訪れた私立の言語治療室では、次男の劇的な発達変容という現実にもかかわらず、自閉症という診断名に拘り、「うちの子を自閉症に追い込んだ」と母親に不信感を植え付けるばかりであった。「曖昧な」病理的な診断には「納得で

きず」, かといって「明確な」診断には, 障害ではないかもしれないとの希望を否定された「絶望感」や「疎外感」が募る。このような障害初期に直面する親の複雑な気持ちを, 誰よりも先にフォローすべき役割をもつのは, 療育機関などの専門家のはずである。ところが, 被検者Aの障害受容過程についての語りには, いずれの機関においても母親の不安や悩みに対するカウンセリングなどが試みられた形跡がない。その理由としては, 韓国における1) 社会的支援体制, 2) 専門家の療育指導姿勢, の2つの問題が考えられる。ハ(1999)は, 韓国の児童福祉サービスの中で, 一番弱い部門は「カウンセリングサービス」であることを指摘している。1998年度の韓国保健福祉部の調査によると, 韓国総人口4400万人のうち, 児童人口は1300万人であるが, 公私を併せた療育機関数は全国で47箇所をすぎず, 一箇所当たり28万人を担当しなければならない現状に置かれているという。被検者が居住するP市も, 人口310万人のうち, 児童人口は74万人であるが, 公立は1箇所, 私立が4箇所という劣悪な環境にある。そのため病院の「小児精神科」を訪ねるケースが多い(ハ, 1999)が, 母親へのカウンセリングは対象外とされていたり, 余裕がないのが実情である。またキム(2003)によると, 日本の臨床場面では, cure から care へ移行しているのに対して, 韓国の場合は, いまだ cure を主とする一方的なアプローチに止まっているという。本研究の事例でも, 韓国の治療者は母親の不安を理解し, 同行する姿勢よりも, 一方的に母親に子どもの障害を刻印させる形式的な指導の姿勢(ジョン・オ, 1990)を取っており, それが母親の障害受容を阻害する要因となった。今後の韓国の課題として, 治療者に治療と教育の両方を併せ持った療育指導の視点を獲得させるとともに, 子どもの療育や母親のカウンセリングを主体とする療育指導機関を設置していくなど, 問題を持つ子どもと母親の双方に対する社会的支援体制を充実していくことが望まれる。

ところで, 被検者Aは<絵本を読む大人の会>に参加し, そこで出会った母親を母親役割の準拠モデルとすることで, 子どもへの関わり方や期待内容の見本となる情報を得て, これまでの子どもとの関わり方を改善するようになった。また, 子育ての悩みについて夫からも支えられることで, 次第に子どもの障害を受容するようになり, 次男の幼稚園の先生に, 「他の子どもに迷惑をかけていませんか, 他の母親からうちの子を幼稚園に来させないようにしてほしいといわれませんか」と自ら言い出せるほど, 積極的な言動が取れるように変化した。被検者Aの不安に対して幼稚園の先生からは, 「そんなことはない」「他の子どもたちが助けられる部分が多い」と受容的にサポートされている。先行研究(たとえば, ビョン, 2001; リ・クォン・ソ, 2001)において, 夫や幼稚園の先生といった育児ネットワークによる母親への支援が, 子どもの障害を受容するよう促すことが報告されているが, 本研究の事例でも母親の障害受容に有効であることが確認された。また, 子どもの障害という問題は, 母親にこれまでの子どもとの関わり方についての確固たる自信を揺るがせ, 子育ての仕方についての再考を迫る(神園, 1999)。そのため, 学歴偏重の子育て(金, 2002, 2003, 2004)ではなく, 「子ども中心」のより「建設的な方向」へ向かって, 新たな子育てモデルを求められるようになると考えられる。そこで注目されるのが, 「子どもとの関係が円満で, 心安らかな人々との比較」への補足質問での被検者Aによる回答である。「<絵本を読む大人の会>で出会った母親のことなんですけど, 他の周りの母親とは違う考え方をもっているんですね。子どもを一生懸命遊ばせたり, 想像力を高めようとしたり……基本的なベースの教育を大事

にするんで、子どもをリードして行こうとする他の母親とは違うと思いますね」と語っている。この報告は、子どもとどのように関わるべきか、どう育てるべきかの情報と評価基準が、〈絵本を読む大人の会〉で知り合った母親を準拠モデルとして摂取されたことを明瞭に示すものである。そして、育児ネットワークの情報・評価的機能<sup>8)</sup>もまた、子どもの障害受容に関わる重要な鍵となる、注目すべき機能であることを示唆する事例といえよう。

## 2. 子どもの障害がもたらす影響：母親としての自己受容と家族関係の再構築

クラスター全体のイメージについては、被検者自身の「良き母親になろうとするコンプレックス」への気づきから始まる。Thurer (1994) は、「良い母親」とは歴史的・文化的に作り上げられてきた「幻想」に過ぎないことを指摘しているが、多くの母親にとって「良い母親」とは、「やさしく、暖かく、抱擁力」を保ち（清水・前田・松永・依田, 1993）、子どもに対する「衝動的な怒り」をコントロールできることである（野口・石井, 2000）。しかし、現実の母親は天使ではなく、ときには間違いを犯し、子どもに対しても相反する衝動的な怒りを感じるものが少なからずある。被検者Aの報告からは、暗黙のうちに「良い母親という幻想」をとらえており、現実の母親としての「あるがまま」の自分を受け容れ、子どもに怒りを自然に表現できるようになって、ようやく身体的症状の改善がみられるようになったことがうかがえる。東山 (1971) は、知的障害のある幼児の母親に対するグループ・カウンセリングを行い、現実自己と理想自己の一致度の高いことが、現実受容に関連することを見出している。本研究の被検者の場合は、子どもの障害に対処する過程で準拠モデルに出会い、自ら現実の母親としての自分を直視し自己受容することになって、子どもの障害受容を進めることができたと考えられる。

また、被検者Aの母親としての自己受容は、健常児である長男との関係にも変化をもたらしている。一般に、障害のあるきょうだいをもつ子どもの場合、障害児の療育に追われる親を配慮し、自分のつらさ、怒り、悲しみなどネガティブな感情を表さずに大人のように振舞う（ジュ, 2000）。しかしながら、子どもが感情を表出しないで、ところどころ不満をぶつけるだけでは、親は子どもの気持ちを察知することができず、親と子の間の情緒的な交流は困難に陥りやすい（大河原, 2004）。被検者Aと長男とのやり取りにおいても、最初はお互いにネガティブな感情をコントロールしていたが、被検者が「あるがまま」の母親としての自分を受け容れ、自然に感情を表出できるように変化すると、子どももまた自分の感情を自然に表出できるように変わった。「ママ、まだ怒っているの？ ママが怒っていると僕の気分も良くない。早く笑って」と話しかけてくるほどになる。被検者と子どもとの喧嘩は、被検者に自身を「子どもみたい」と感じさせる一方、親子に円満な関係をもたらす感情の交流とみなされるように変化している。子どもの障害は、母親と障害児の関係のみならず、母親と健常なきょうだいとの関係をも調整するきっかけともなっている。本研究事例でも確認されたように、障害児の母親のカウンセリングを行う際には、他の家族成員との関わりも視野に入れる家族療法的視点をもつ必要がある（ジョン・オ, 1990）と考えられる。

<sup>8)</sup> なお、この機能に関しては、他の母親を準拠モデルとして、その言動を参照しているため、参照的機能と呼ぶこともできよう。

## おわりに

本研究では、発達障害児をもつ韓国人母親に母親役割についての PAC 分析を行い、障害受容のイメージ構造を探った。その結果、障害児をもつ母親の不安や悩みを軽減し、子どもの障害受容を促進する要因として、社会的支援体制が重要な役割を果たしていることが明らかとなった。これは韓国における療育指導関連施設の未整備状況によって顕在化したものである。他方で、社会的支援体制の未整備状況を補完する形で、育児ネットワークの機能が明瞭となった。通常、日本では児童相談所が担う情報・評価的機能が、これらの機関から得られない場合に、育児ネットワークでの情報・評価的機能が顕在化することを、本研究は示している。被検者 A は、障害児の子育てに不安や悩みを抱えながら、病院や他の治療施設を転々とする。やがて、〈絵本を読む大人の会〉に入会し、準拠モデルに出会い、子どもへの関わり方や子育ての目標に大きな影響を受けるようになる。このような育児ネットワークの情報・評価的機能は、障害児をもつ母親にのみならず、多様な選択肢があり得る日常的な子育てや母親としての振る舞いにおいても、大いに影響を及ぼすことが推量される。また本研究によって、子どもの障害受容は、母親としての自己受容や健全なきょうだいとの関係の調整をもたらすことも確認されたが、健常児のみをもつ母親においても、母親自身のアイデンティティ確立感などが、子どもや他の家族との関係に影響することが推測される。

ところで、母親が子どもの障害を受容するプロセスには、「導入期」「受容的態度を取ることへの反発期」「受容の表面的理解期」「受容の深い理解と実践期」の4つの段階がある（内藤, 1989）。本研究の各クラスターのイメージ報告、クラスター間の比較の報告の後、全体イメージの報告をする段階に達すると、被検者 A は「今振り返ってみると、人生には上り坂と下り坂があって、トータルして大きな変化はないと感じます。……一番大事なことは思い通りに行かないことです」と笑いながら思いを語る。それぞれのクラスター間の比較によって、時間的展望が示唆され、子どもの障害が深く受容され、母親の人生観にまで大きな影響を及ぼしていることがうかがえる。とはいえ、連想項目の「+」「-」評定は、やや肯定的ではあるものの、葛藤状態を示すものであった。奇・大野（1996）は、母親の障害受容にはアンビバレントな感情が伴うことを指摘している。本研究の結果からも、「受容」が必ずしも「肯定的」な感情だけではないことが示唆される。むしろ、否定的な感情や肯定的な感情の両方が激しく交錯することで、はじめて子どもの障害に対する「深い受容」が行われるようになるのかもしれない。また、韓国人が差別する人として、第1位が「障害者」、第2位が「学歴の低い人」、第3位が「外国人労働者」だという（文化日報、2004年11月4日付）。将来、子どもが社会生活で差別を受けず、適応できるのかといった不安は、意識しないようにしていても、障害児をもつ韓国人の母親に付きまとうものであろう。したがって韓国の母親にとっては、不安を完全に「排除」するアプローチよりも、障害をもつ子どもの発達段階ごとに、母親が抱える不安を明らかにし、それらをどのようにして「緩和」できるかといったアプローチのほうが有効ではないかと考えられる。そのためには、それぞれの母親の不安を聞き、それぞれに「見立て」をし、介入していくことが必要であろう。PAC 分析は研究に限らず、個人別の診断・治療に効力をもち、臨床実践に有用な手法であること（内藤、

2000) から、韓国における母親のための臨床的介入においても、活用できる技法と考えられる。韓国社会の母親への療育指導やカウンセリングの整備と充実、PAC分析をはじめとする診断・治療技法の活用が早期に望まれる。

## 引用文献

- 文化日報 やさしい社会を目指そう 2004 (ソウル, 2004年11月4日付)
- ビョン ジョンスク 障害児童の家族影響力と母親の心理的・身体的健康 忠北大学大学院 修士論文 2001 (未公刊, 韓国語)
- ハ スンミン 韓国の児童福祉政策分析: 児童相談を中心に 韓国生活科学会誌, 8(3), 1999, 465-476 (韓国語)
- 東山紘久 精神薄弱幼児の母親研究——Q技法をもちいて—— 京都大学教育学部紀要, 17, 1971, 113-130
- ジョン ギルス・オ ギョンオク 障害児の母親のストレスと家族機能に関する研究 忠南医大雑誌, 17(1), 1990, 283-299 (韓国語)
- 神園幸郎 自閉症児の発達に及ぼす母親の意識変革の影響 琉球大学教育学部障害児実践センター紀要, 1, 1999, 1-16
- 韓国保健福祉部 保健福祉統計年報 1998 (韓国語)
- 奇 恵英・大野博之 障害者をもつ母親の心理特性を捉える面接の試み 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 41(2), 1996, 219-226
- キム ユスク 韓国の家族問題と家族療法の動向 家族療法研究, 20(3), 2003, 246-249
- 金 娟鏡 子育て観の韓日比較: 「文化としての子育て」日本保育学会第55回大会発表論文集, 2002, 834-835
- 金 娟鏡 日韓の母親における「子育て観」の因子分析的研究 応用心理学研究, 29(1), 2003, 17-26
- 金 娟鏡 社会的出来事によって喚起される母親役割の日韓比較——母親役割満足感との関連——家庭教育研究所紀要, 26, 2004, 27-34
- 権平俊子 心理臨床における治療 本明 寛(編) 心理臨床入門: 診断・治療の臨床心理学 1980 川島書店 pp.83-158
- 内藤哲雄 母親の受容的態度が情緒障害の治癒に及ぼす効果 長野大学紀要, 11(3), 1989, 51-60
- 内藤哲雄 PAC分析実施法入門: 「個」を科学する新技法への招待 1997 ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄 留学生の孤独感のPAC分析 人文科学論集<人間情報学科編>, 34, 2000, 15-25
- 内藤哲雄 PAC分析実施法入門: 「個」を科学する新技法への招待(改訂版) 2002 ナカニシヤ出版
- 夏堀 撰 就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程 特殊教育学研究, 39(3), 2001, 11-22
- リ ハンウ・クォン ミョンオク・ソ ウンジョン 障害児童の母親の社会的支援特性研究 特殊教育リハビリ科学研究, 40(1), 2001, 193-217 (韓国語)
- 野口恭子・石井トク 乳幼児をもつ母親の子どもに対する衝動的な感情と反応 小児保健研究, 59(1), 2000, 102-109
- 大河原美以 親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響——「よい子がきれる」現象に関する試論—— カウンセリング研究, 37, 2004, 180-190
- 清水弘司・前田央子・松永顕子・依田 明 幼児をもつ母親の「よい子」「よい母親」「よい父親」

- 概念 家庭教育研究所紀要, 15, 1993, 33-43
- 竹内紀子 療育機関に通う発達障害児を持つ母親のメンタルヘルス 小児保健研究, 59(1), 2000, 89-95
- 棚原 亨・財部盛久 障害児を持つ母親の障害受容に関する個人別態度構造分析 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 1, 1999, 141-151
- サーラ, シャーリ・L 安次嶺佳子訳「良い母親」という幻想 1998 草思社 (Shari L. Thurer *The Myths of Motherhood*. 1994 New York: Houghton Mifflin Company)
- ジュ ヒョンスク 障害児をもつ家族の障害受容過程 韓国肢体不自由児教育学会誌, 36, 2000, 149-162 (韓国語)